



明治大学

黒曜石研究センター ニューズレター

Center for Obsidian and Lithic Studies News Letter

No. 8, March 2017

国際黒曜石会議 2016 にて研究発表

2016年6月1～3日にイタリア・リパリ島のエオリアン博物館において、黒曜石研究に関わる、考古学、考古理学、人類学、地質学などさまざまな分野の研究者が一堂に会し、国際黒曜石会議 (International Obsidian Conference) 2016 が開催された。本会議は、2011年に黒曜石研究センターで実施された国際ワークショップの後を受けて開催されたものである。組織委員会は、小野 昭 (日本), Y. Kuzmin (ロシア), R. Tykot (アメリカ), M. Glascock (アメリカ), M. Martinelli (イタリア) の5名であり、後援組織は Museo Archeologico Lipari, International Association for Obsidian Studies, The Society for Archeological Sciences, Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University の4つである。黒曜石研究センターは組織委員会、後援組織の両面でこの会議に深く関わっている。今回、センターから小野 昭、池谷信之、島田和高、眞島英壽の4名と、元センター員の隅田祥光長崎大准教授が参加して、日頃の研究成果を発表した。

開催地であるリパリ島の属するエオリア諸島は、噴火様式模式地として知られるストロンボリ島やブルカノ島など、火山活動によって作られた島々であり、ブルカノ島は火山を意味する "volcano" の語源ともなっている。2000年に諸島全体がユネスコ

目次

- ◆ 国際黒曜石会議 2016 にて研究発表 1
- ◆ イタリア・サルディニア島パウ黒曜石博物館一行
センター訪問 2
- ◆ 長野県内の黒曜石関連巡検を行いました
橋詰 潤・土屋美穂 3
- ◆ 藤山龍造准教授角田文衛古代学奨励賞受賞! 4
- ◆ 出版物のお知らせ 4
- ◆ 編集後記

の世界自然遺産に登録された。リパリ島も火山活動で形成された島であり、新石器時代からローマ時代までの遺跡がある。会場となった考古博物館はリパリ港北のかつての要塞跡である高台にバルトロマイ教会などともにある。この博物館はエオリア諸島の調査を行った二人の著名な考古学者 Luigi Bernabò Brea と Madeleine Cavalier によって設立されたとのことである。

会議では、世界各国から集まった研究者によって、口頭発表40件、ポスター発表23件の黒曜石に関わる報告が、地質学、考古学、考古理学、人類学などの分野にわたって行われた。研究地域は東アジア、地中海域、ヨーロッパ、アフリカ、ラテンアメリカ、アナトリア・近東と世界に及んだ。



写真1 国際黒曜石会議 2016 参加の研究者たち



写真2 リパリ島民家下の黒曜石露頭（池谷氏撮影）

考古学的研究としては、池谷、島田両氏が講演した日本における研究が、時間的空間的解像度という点で群を抜いていた。これは、多数の遺跡を発掘調査し遺物を保存してきた日本考古学の世界に対する優位性の表れといえる。一方で、世界的視野に立つと、非常に狭い範囲での人類の活動を議論していることになり、海外研究者はその意義を理解しにくいという面もある。両氏の発表はすでに、海峡横断や気候変動への応答など、自然環境との関係性という普遍的視点からのものだったが、今後もそのような視点からの研究を進め、海外に発信していくことが必要と感じられた。

考古学的研究としては、ポータブルXRFとレーザーICP-MSを用いた理化学分析研究の普及が目を見せた。日本はED-XRFを用いた原産地推定でこの分野で世界をリードしていたが、分析技術の進歩によって研究のアップデートに迫られている。会議前から予想はしていたが、迅速な対応の必要性を感じた。

世界規模での先史人類の動態を理解するためには、ラボ間の分析値のずれを比較検討する必要がある。理化学分析への参加者が増え、分析手法も多様化しており、組織だったラボ間データ校正を行う必要性が高まっている。会議に先立ち組織委員会のY. Kuzmin氏から、真島にこの件について相談があり、分析の基準物質とするため、日本から持参した腰岳産黒曜石スラブを会議中に希望者へ配布した。今後、各ラボでの分析値について比較検討を行い、論文にまとめる予定である。黒曜石研究センターは考古学的研究においても、中心的役割を果たすことが国際的に期待されている。

会議の最後に、次の会議についても話し合われた。その結果、2019年にブダペストで開催することが了承された。各国からの参加者は、3年後に研究を進展させ再会することを互いに約束してリパリを後にした。なお、2016年会議と2019年会議の詳細については、以下のURLを参照いただきたい。

2016 会議：<http://rtykot.myweb.usf.edu/Obsidian%202016/>

2019 会議：<http://ioc-2.ace.hu>

イタリア・サルディニア島 パウ黒曜石博物館一行センター訪問

2016年11月4日（金）に黒曜石研究センターが研究協定を結んでいるイタリア・サルディニア島のパウ黒曜石博物館一行が、日本旅行の途中、長和町鷹山のセンター施設を訪問した。協定締結以来、今回が初めての人的交流である。日程調整を行ったが双方の都合がつかず、金沢から大阪への移動途中での訪問となった。上田駅―鷹山間の移動を考えると、センター滞在時間は2時間弱しかとれそうもなく、時間配分を心配しながら当日を迎えることになった。

10:11に上田駅に新幹線で到着した一行を小野前センター長と真島で出迎えた。初対面だったが、明大シンボルマークの入った記念のTシャツを着ていてくれたので、すぐに一行とわかり打ち解けることができた。限られた時間での訪問のため、上田駅からセンターまで移動のバスの中で、センター設立に関わる長和町と明治大学の協力史や、センター設立後の研究プロジェクトなどについての説明を小野前センター長が行った。その際、大学本部とセンターの関係など活発な質問が出た。

センター到着後は、真島がXRFなどセンターの施設概要と、それらを使って地質黒曜石化学組成データベースの構築や、非破壊XRF分析法の検討など現在進行中の研究について説明を行った。その後会議室で、松花堂弁当を取りながら歓談した。国際ワークショップなどのためにセンターに準備しているナイフとフォークがたいへん感謝された。

隣接する長和町黒曜石体験ミュージアムへ食後に移動し、館内展示と実施されている体験プログラムについて、小野前センター長の通訳を交えつつ、大竹幸恵学芸員から説明していただいた。パウ博物館がサルディニア島内陸部にあることなどから、体験ミュージアムの活動内容について、「プログラムに使用する石材はどのように準備するのか?」「どういった人達を対象にするのか?」など、具体的な質問が多くでていた。説明の後は体験プログラムに使う材料の準備の様子を見学させてもらい、スタッフの方々とともに交流を行った。



写真1 パウ黒曜石博物館一行（黒曜石体験ミュージアム前にて）

長野県内の黒曜石関連巡検を行いました

橋詰 潤・土屋美穂

2016年10月13日から14日にかけて長野県内の黒曜石に関連する巡検を行いました。今回は、白滝ジオパーク、隠岐ユネスコ世界ジオパーク、おおいた姫島ジオパークなど大規模な黒曜石原産地を有するジオパーク認定地域、長野県内やその他の黒曜石に関係する方々をお招きして、長野県内の黒曜石原産地や関連する遺跡、施設などを意見交換を行いながら巡りました。巡検での主な訪問先は茅野市尖石縄文考古館、麦草峠、黒曜石研究センター、長和町黒曜石体験ミュージアム、国史跡星糞峠黒曜石原産地遺跡、長和町広原遺跡および広原湿原、星ヶ台、茅野市および下諏訪町の御柱木落とし坂などです。



写真2 大竹さん（左）の説明を熱心に聞くパウ黒曜石博物館一行

交流を深めているうちに、あっという間に時間はすぎ、列車の時間が近づいてきた。周辺の原産地遺跡についても「ハイキングは得意なので是非見学したい」との希望だったが、次の機会にと断念してもらいセンターを後にした。上田駅にバスが着いたのは一行の乗車予定の新幹線の発車時刻（14:37）の15分ほど前で、なんとか胸をなで下ろした。改札口でパウ博物館側の鷹山再訪とセンター側のパウ訪問を互いに招待しあい、近日中の再会を約束して別れた。

非常に短時間の訪問だったが、センターとパウ博物館の初めての人的交流として意義深いものだった。同じ分野に興味がある人とは、あっという間に打ち解け合えるのも研究に携わる醍醐味だと改めて知らされた一日だった。今回の交流が黒曜石研究センターとパウ黒曜石博物館の共同研究や、パウと長和町の国際交流へと継続発展していくことが期待される。大竹さんはじめ体験ミュージアムの方々には、たいへんお世話になった。改めて御礼申し上げます。パウ黒曜石博物館に興味のある方は以下のURLのHPをご覧ください。

<http://www.museossidiana.it/>



写真3 明大とパウ博物館のマークの入った旅行記念Tシャツを着て微笑む Giulia Balzano さん（パウ博物館）と大竹さん（長和町）。手にしているのはパウ博物館のコースター



写真1 橋詰特任講師から黒曜石研究センターの活動について説明を受ける参加者のみなさん

限られた時間の中でしたが、長野県内の黒曜石が持つ研究対象や地域資源としてのポテンシャルの高さや、これまでに取り組みられてきた黒曜石の活用事例などについてご覧いただくことができ、様々な感想やご意見をいただくことができました。さらに、人と地球（ジオ）をつなぐ資源であり、人のくらしと地球の活動とを具体的に結び付けて考えることができる黒曜石が持つ重要性についても様々な議論や意見交換を行うことができました。加えて、ジオパークや黒曜石に関連する地域や組織、研究者をつなぐ場として、「黒曜石ネットワーク」の立ち上げについても話し合いが行われました。最後に、今後も黒曜石を通じて連携しながら人のくらしとジオについて、研究から保存・活用までの取り組みを進めることを目指すことを互いに確認しつつ今回の巡検は散会となりました。非常に有意義な機会となっただけでなく、今後のさらなる展開にも期待が持てる結果になったといえます。

ご参加いただいた皆様、さらに当日ご案内いただいた茅野市教育委員会の小林深志氏、黒曜石体験ミュージアムの大竹幸恵学芸員には大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

出版物のお知らせ

黒耀石研究センターから紀要『資源環境と人類』第7号と、資料報告集3「更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 vol. 2」が2017年3月に刊行されます。これらに掲載されている論文などは、センターのホームページにおいて閲覧およびPDFをダウンロードすることが出来ます。是非、ご活用ください。



写真2 長和町黒耀石体験ミュージアムの活動について説明をうける参加者のみなさん

藤山龍造准教授角田文衛古代学奨励賞受賞！

2016年10月1日、センター員である藤山龍造文学部准教授が古代学協会の第6回角田文衛古代学奨励賞を受賞されました。同賞は古代学協会の創立者角田文衛博士を顕彰して創立された賞です。古代史研究の奨励と将来性ある若手研究者の支援が目的とされており、季刊『古代文化』への投稿論文の中の秀作に与えられます。藤山准教授は、『古代文化』第66巻第1号に掲載された論文が評価されての受賞となりました。受賞理由などの詳しい説明は以下の古代学協会HPをご覧ください。

<http://www.kodaigaku.org/syoreisyo/syoreisyo01.html>



写真1 授賞式の様子（古代学協会提供）

藤山龍造准教授の受賞コメント

このたび栄誉ある角田文衛古代学奨励賞を賜ることが出来ました。まずは、これまでご支援いただいた皆様に感謝申し上げます。今回の選考では栃原岩陰遺跡の研究成果を評価していただきましたが、これは黒耀石研究センターの地元である長野県の文化資源が高く評価された結果でもあります。本センターの将来像を思い描くとき、グローバルな視野と同時に、地元とのローカルな連携がこれまで以上に必要と考えています。今回の受賞が一つの切っ掛けとなれば、これほど嬉しいことはありません。



編集後記

黒耀石研究センターニューズレター第8号を発行しました。今号では、前号でお伝えできなかった国際黒耀石会議2016の様子などを中心にお伝えしました。本年度は新体制のスタートの年でしたが、記事でお伝えした通り、センターの国際連携・地域連携での役割を再認識する年でもありました。シンポジウムの開催やセンター関係者の活躍など、本紙でお伝えできなかった内容についても、逐次フェイスブックでお伝えしていますので、どうぞご覧ください。(HM)

明治大学黒耀石研究センターニューズレター 第8号

発行日：2017年3月1日

編集：眞島 英壽

発行：明治大学黒耀石研究センター

〒386-0601

長野県小県郡長和町大門 3670-8

電話：0268-41-8815

URL: <http://www.meiji.ac.jp/cols/>

[https://www.facebook.com/ 明治大学黒耀石研究セン](https://www.facebook.com/明治大学黒耀石研究センター)

[ター -564680010333699/?notif_t=page_fan](https://www.facebook.com/明治大学黒耀石研究センター)

印刷：中澤印刷株式会社

〒386-0002

長野県上田市住吉 1-6

電話：0268-22-0126



※当センターでは施設の固有名称として「黒耀石」の表記を使用しています。